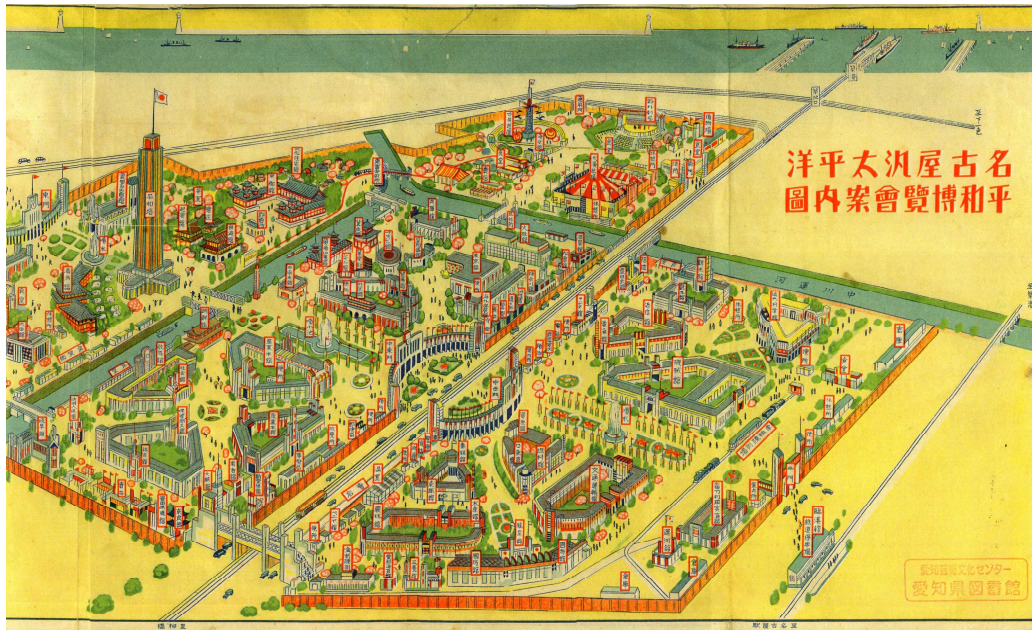


国際都市化への契機

～名古屋汎太平洋平和博覧会～



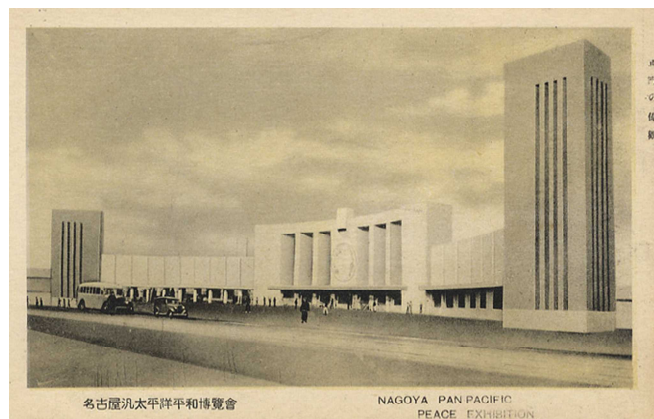
名古屋汎太平洋平和博覧会会場鳥瞰図 出典：『名古屋汎太平洋平和博覧会案内』、愛知県図書館蔵

主催は名古屋市。愛知県・名古屋商工会議所が協賛。来場者数は約480万人。国外からは、29の国と地域が参加。国内は鳥取県以外の全道府県が参加。昭和戦前期における国際的博覧会として規模・入場者数とも最大級のものであった。

会場には、名古屋港開港30周年を記念するという開催の趣旨を踏まえて、南区熱田前新田（現・港区役所周辺）15万坪が選定された。会場内には中川運河の支線運河もあり、名古屋市が工場立地の展開を望んでいた南部臨海工業地域で開催された。

■博覧会の効果

博覧会事業単体で黒字化（収入335万4千円／支出328万円、計7万4千円の黒字）。博覧会に関連して、行政主導で国際的大都市に必要な都市インフラも整備が進められた。道路整備や市電「博覧会線」を敷設。これらまで含めると費用総額は1600万円余に上る。昭和12年度の市の土木費純計は188万円余。この8倍強の金額が約2年間に投入された。



とくに会場となった臨港地域の開発が進化した。名古屋市が進めていた中川運河沿岸の敷地分譲も売れ行きが活発化した。

名古屋汎太平洋平和博覧会会場 出典：『名古屋汎太博絵葉書』、愛知県図書館蔵